

ILCグローバル・アライアンス事務局便り

エージブーム・アカデミー

マサコ・オサコ Ph. D.

ILCグローバル・アライアンス 事務局長(在米国)

■ はじめに

ILC-USAは、ベテランジャーナリストやメディア専門家向けに「エージブーム・アカデミー」と呼ばれる連続セミナーを、2000年以降継続して毎年開催してきた。

このアカデミーでは、全国から12人以上のジャーナリストがニューヨークのILC-USA本部に集い、人口高齢化が個人の生活に留まらず、世界の政治、経済や社会に及ぼす影響と、その報道にあたっての様々な視点について、1週間にわたり学ぶことができる。セミナーのプログラム作りにあたっては、長寿革命とでも言うべき未曾有の平均寿命の伸長とその影響について、ジャーナリストの報道を通じて一般の人々が理解を深めるための、様々な工夫が凝らされている。

過去にアカデミーで学んだ120人以上のジャーナリストが、全国紙、地方紙、テレビ、ラジオなどで高齢化について積極的にレポートを行うことで、アメリカにおける高齢者報道のあり方において、エージブーム・アカデミーは重要なインパクトを与えていると言える。

■ 背景

このようなセミナーのさきがけとして、過去にILC-USAとJapanの共同事業としてのメディア向けセミナー開催が企画・運営された経緯がある。1990年代の半ば、ILCの伊部英男・ロバート・バトラー両理事長と日本の行天理事は、一般の人々に世界的な人口高齢化とそれに関する様々な課題について正しく広報しまた啓発するためには、まず始めにメディアを対象にした活動を行う必要がある、という共通認識を持っていた。

1995年ILC-USAは、ジャーナリストを対象に第一線の専門家が広範囲の高齢化関連問題を論じる1日セミナーを、テストケースとしてコロンビア大学で行った。これに次いで1997年



1997年のメディアプロジェクト参加者

■ 最近の講義とディスカッション・セッションのテーマ

- 「高齢投票者に関する神話と現実」
(パネル・ディスカッション)
- 「90歳は新時代の50歳：長寿の科学」
- 「社会保障をめぐる議論：2008年大統領選挙」
- 「Medicare改正をめぐる政治的側面」
- 「ナーシングホーム規制法をめぐる真実」
- 「メディア、政治と高齢化」
- 「高齢化の特集報道—学問から現実へ」(円卓討議)
- 「ニュース・メディアにおける年齢差別」

に日本のメジャーな地方紙のジャーナリスト13名と、アメリカにおける医療や介護、福祉を専門にするジャーナリスト17名、そして専門家約20名が、高齢化に関する3日間のセミナーに参加すべくニューヨークに集った。

「メディア・プロジェクト」と呼ばれたこのセミナーでは、両国のジャーナリストは自国の人口高齢化とそれに関わる様々な問題を紹介しあうとともに、問題解決のため相手から学べることはなにかを追求し、また高齢社会において目指すべき報道の姿勢についても熱心に話し合った。

これらの経験を経てILC-USAではジャーナリスト研修プログラム・モデルを練り上げ、それがのちにエージブーム・アカデミーに成長した。残念ながら日本ではその後継続した取り組みが成立しなかったが、その理由に関しては少なくとも一部は、メディア産業の構造に起因するのかも知れない。1997年のセミナーで行天理事は次のように述べている。

「日本では新聞、放送、出版で働く多くの方は、基本的には企業に属するサラリーマンです。アメリカのように、高齢問題の専門家であることを武器にあちこちのメディアをわたり歩くというタイプとは、その成り立ちが違います。」

アメリカでは2000年に正式に発足したエージブーム・アカデミーは、年々多くの参加者を集め続けており、これらの講座を受講したジャーナリストはABCニュース、CNN、USA Today、NPR、Business Week、Forbesなどの一流のマスコミで活躍している。

■ このアカデミーのプログラム

現在ILC-USAが主催する1週間にわたるエージブーム・アカデミーの最大の特徴は、理事長でCEOのロバート・バトラー博士を中心とした超一流の専門家による講義にあると言ってよ

いだろう。アカデミーの“教授”は、精神科医であり著名な老年学者であるバトラー博士以下、生物学、医学、長寿科学、哲学、歴史、経済、政治、メディア論、その他分野の超一流の専門家が務めている。“教授”にはノーベル賞受賞者のロバート・フォーゲル(経済学)、スタンリー・プルシナー(医学)、ロバート・ビンストック教授(アメリカ老年学会前理事長)、ジャック・ローゼンター(ニューヨークタイムズ財団理事長)なども含まれている。

■ アカデミーのパートナー

エージブーム・アカデミーはその創設以来、共同主催者であるニューヨークタイムズ財団の援助を受けており、アカデミーを修了した人々はジャーナリストにとっての憧れである「ニューヨークタイムズ社友」に指名される資格が得られる。2006年からはスタンフォード・長寿センターがプログラムの共同提供者に加わった。

■ ジャーナリストの選抜

毎年ILC-USAに提出された参加申し込み者の得点によって、12人以上のジャーナリストが選ばれる。選抜にあたっては出願者のジャーナリストとしての業績とともに、高齢化問題に関する観点の多様性が重要な基準になっている。

すでに多くの高齢化レポートを発表している人がいる一方、世界の人口高齢化が政治、経済や社会に与える影響や、ジャーナリストの報道のすべての側面に関心を持つコラムニスト、スタッフライター、テレビレポーターなども参加している。

■ アカデミーの目標

このアカデミーにおける目標は以下のように掲げられている。

1. 高齢化の主要課題に関するジャーナリストの啓発を通して、長寿に関するニュース報道の範囲を拡大し、その質の向上を図る。
2. 放送、出版、オンライン、メディア機関の全国と地方の第一線のジャーナリストのイベントへの参加を促す。
3. 人口高齢化に関する主要なトピックスについて、ジャーナリストに働きかけるための権威ある第一級の専門家を提供する。
4. 高齢化の諸問題に関する報道を促進するために、ジャーナリストとの強力なコンタクトを確立する。

■ 最近のアカデミー修了者からの感謝状

人口高齢化問題の様々な側面の認識を深める上で効果的であったとして、アカデミー修了者からは多数の感謝のコメントが寄せられている。

トが寄せられている。

「長寿が大きな国家的問題となると、エージブーム・アカデミーは高齢化問題に関するジャーナリスト向けの最善の、強力なインパクトのある講座である」

——シカゴ・トリビューン誌 ビル・ナイカーク

「エージブーム・アカデミーは、答えと疑問がめまぐるしく変化し続けるような、高齢化に関する最先端の分野をめぐる旅を提供する」

——キングテレビ、NBC放送 パット・ダガン

「各分野のリーダーたちから学び、彼らと自らに疑問を発し、参加者同士が考えを交流する貴重な機会である」

——AARP Bulletin ジム・テッドマン

「高齢化問題の私の報道を深く広いものにする、実り多い知的な刺激に満ちた1週間であった」

——クリスチャン・サイエンスモニター誌 メリリン・ガードナー

■ 日本との関わり

21世紀において日本が直面する高齢化の課題は、一層複雑さを増している。なぜならば課題の解決にあたっては、経済的、政治的、文化的、技術的、環境的要素のダイナミック相互作用が追求されなければならないからである。

このような議論を効果的に行うためには、高齢化に関する広範囲の知識と、洗練された分析力、それに総合的・複眼的な視点が要求される。そして、まさしくこれらはエージブーム・アカデミーが目指す観点そのものである。

この事実を踏まえたくて、1997年にニューヨークで開催されたメディア・プロジェクトにおける行天理事の発言を、改めて提起しておきたい。

「高齢社会が抱える問題が深刻で大きなものになればなるほど、総合的・複眼的な視点で冷静に問題の所在を突き止めていくジャーナリズムの存在が必要とされます。世界に先駆けた少子高齢社会の到来、そこには何が待ち受けているのか。混沌とした21世紀の日本の水先案内人のような役割をはたすべき、これからの若いジャーナリストの方々には大いに期待しています。」

21世紀の日本のメディアは、エージブーム・アカデミーのようなプログラムの恩恵を受ける機会を持てるだろうか。

(翻訳：ILC-Japan 事務局)